

玄心撰『一切経音義』第二十卷における『仏所行讃』音義

李
乃
琦

LI Naiqi

The *Buddhacharita* is widely recognized for its literary value and religious significance as a poetic text praising the merits and virtuous deeds of the Buddha. This paper focuses on the annotations of the *Buddhacharita* in the 20th volume of the *Yiqiejingyinyi* by Xuanying, with the aim of elucidating the background of the expressions and phrases used in the Buddhist texts.

The “*Yiqiejingyinyi*” played the role of a dictionary, explaining difficult words and phrases appearing in Buddhist scriptures through annotations, and contributed greatly to the understanding and spread of Buddhism. The words and phrases treated in the *Yiqiejingyinyi* reflect the cultural background and tradition of Buddhist literature of the time, and aim to deepen Buddhist thought through the interpretation of the *Yiqiejingyinyi*. In this paper, through the interpretation of the *Yiqiejingyinyi*, the sutra readings, and the translations and commentaries, I will revisit the *Buddhacharita* from relevant linguistic and cultural perspectives.

玄応撰『一切経音義』第二十卷における『仏所行讃』音義

李 乃 琦

『仏所行讃』は、仏陀の功績や徳行を賛美する詩的な文として、その文学的価値と宗教的意義が広く認識されている。本稿では、玄応撰『一切経音義』第二十卷における『仏所行讃』の音義注釈に焦点を当て、經典で用いられる表現や語句の背景を説明する。

『一切経音義』は、仏教經典に登場する難解な語句を音義を通じて解説する辞書的な役割を果たし、仏教の理解と普及に大いに貢献した。そこで取り扱われる語句は、当時の文化的背景や仏教文献の伝統を反映しており、音義の解釈を通じて仏教思想の深化を目指している。本稿では、音義の解釈や經典の訓読および訳注を通じて、『仏所行讃』に関連する言語的・文化的な視点から再考を加える。

凡 例

本稿では、玄応撰『一切経音義』第二十卷に記載されている『仏所行讃』の音義を中心に、その詳細な内容を解説する。構成は以下の通りである。

- (1) 音義の記述…各項目ごとに、玄応撰『一切経音義』における記述を

提示する。翻刻においては、字体は高麗版をそのまま使用する。

- (2) 經典本文該当箇所…関連する經典の本文を、大正新修大藏經に基づいて引用する。また、『一切経音義』見出し語の出現場所に傍線を付した。

- (3) 訓読・和訳…『一切経音義』における語釈内容を訓読および和訳する。また、訓読の場合、必要な補足を（ ）内に記入した。

- (4) 注釈…各語句の背景や文献情報を補足し、解釈を深める。引用に際しては、大正新修大藏經を基準にし、異なる版の用字についても必要に応じて言及する。

- (5) 『一切経音義』と經典の用字を忠実に反映するため、可能な限り旧字を使用する。

第一卷

第1項目【眙屬】

治滕反。『通俗文』直視曰眙。經文作瞪、直耕反。二形通用。滕音以證反。

經典本文該当箇所

如來處世間、兩足中爲最。淨目脩且廣、上下瞬長睫。瞪矚紺青色、明煥半月形。此相云何非、平等殊勝目。(T0192_04.0002a21~T0192_04.0002a24)
觀者挾長路、側身目連光。瞪矚而不瞬、如並青蓮花。臣民悉扈從、如星隨宿王。(T0192_04.0005b29~T0192_04.0005c02)

訓読

(眙の音は) 治と滕の反。『通俗文』(に曰く)、直ちに視ることを「眙」と曰う。經文には「瞪」と作す。(瞪の音は) 直と耕の反。二形通用す。滕の音は、以と證の反。

和訳

眙の反切は治と滕である。『通俗文』には「じつと見ることを『眙』と呼ぶ」と記されている。また、經典には「瞪」と書くとされている。瞪の反切は直と耕である。この二つの形は通用する。滕の反切は以と證である。

注 釈

1 眙……「眙」、『広韻』(中略)直視貌。一作瞪。現在の太正藏では「瞪」の出現回数が圧倒的に多い。「眙」は『樂邦文類』(No.1969)、『宋高僧伝』(No.2061)、『続伝燈錄』(No.2077)、『兩部大法相承師資付法記』(No.2081)でしか見られない。

「眙」『說文解字』、直視也。从目台声。丑吏切。(直視なり。目を構成部品に、台の音を表す。丑吏切。)

「瞪」『說文解字』には見られないが、『玉篇』では「怒目直視貌」とされる。

2 矚……『類篇』には「視之甚也」と記載されている。『魏書・張淵伝』では「凝神遠矚」、『晋書・桓温伝』では「眺矚中原」と記されている。

3 二形通用……「眙」と「瞪」という二つの表記は、どちらも同じ意味で通用することを述べている。これは、漢字の異なる表記法が同一の概念を表現する場合があることを示す。

第2項目【細縵】

字體作鞞、莫槃反。鞞、覆也。經文作縵、慢二形、並非也。

經典本文該当箇所

仙人觀太子、足下千輻輪。手足網縵指、眉間白毫時。馬藏隱密相、容色炎光明。(T0192_04.0002c27~T0192_04.0002c29)

妙淨鮮花服、同車爲執御。街巷散衆華、寶縵蔽路傍。垣樹列道側、寶器以莊嚴。(T0192_04.0005b25～T0192_04.0005b27)

訓 読

字体は「𦘒」と作す。(縵の音は)莫と槃の反。𦘒は、覆うなり。經文には𦘒と𦘒の二形作す、並せて非なり。

和 訳

字形は「𦘒」とし、縵の反切は莫と槃である。「𦘒」は覆うことを意味する。經文では「𦘒」と「𦘒」の二つの形があり、どちらも誤りである。

注 釈

1 縵……縵は「覆う」や「網状に広がる」という意味を持つとされる。ここでの「網縵指」とは、手足に網状の構造や繊維が絡みついている様子を指すと考えられる。

2 「𦘒」と「𦘒」……經典では「𦘒」と「𦘒」の二形が見られるが、これは誤りであると指摘されている。

3 宝縵……經典中で「宝縵」とある。「宝縵」は単なる覆いではなく、特別な意味を持つ装飾的なものとして描かれていると考えられる。

第3項目【苕𦘒】

徒彫反、下徒帝反。左思『呉都賦』云、曠瞻迢𦘒。劉逵曰、苕𦘒、遠望懸絶

也。

經典本文該当箇所

爲立清淨宮、宏麗極莊嚴。高峙在虛空、迢𦘒若秋雲。溫涼四時適、隨時擇善居。(T0192_04.0004c01～T0192_04.0004c03)

訓 読

(苕の音は)徒と彫の反。(𦘒の音は)徒と帝の反。左思の『呉都賦』に云う、「曠く瞻れば、迢𦘒たり。」劉逵曰く、「苕𦘒は遠く望んで懸絶するなり。」

和 訳

苕の反切は徒と彫である。𦘒の反切は徒と帝である。左思の『呉都賦』には「広々と眺めると、はるか遠くに隔たっている」と述べられている。劉逵は「遠くを見渡すと、非常に遠く離れていることだ」と説明している。

校 異

1 「左思『呉都賦』云、曠瞻迢𦘒。劉逵曰」……磧砂藏あり、高麗藏に存しない。

注 釈

1 呉都賦……西晋時代の左思による作品で、都城賦の形式に分類される。特定の都市や都を題材にして、その歴史、風景、文化などを描写する文学

形式であり、『呉都賦』は当時の呉（現在の江蘇省や浙江省を含む地域）を指す。

2 「劉達曰、苕霅、遠望懸絶也」……劉達は、苕霅を「遠く望んで懸絶するもの」と説明している。ここでの「懸絶」は、視界が非常に遠くまで続き、物理的に隔たっている様子を意味する。

3 苕霅……物の遠さや隔たりを強調する表現として使われており、この語はその視界が非常に広く、遠くまで続いていることを意味する。

第4項目【扈從】

胡古反。扈、廣大也。又『爾雅』云、亦使也。養馬也。又『方言』廣也。

經典本文該当箇所

觀者挾長路、側身目連光。瞪矚而不瞬、如並青蓮花。臣民悉扈從、如星隨宿王。（T0192_04.0005b29～T0192_04.0005c02）

訓読

（扈の音は）胡と古の反。扈は広大なり。また、『爾雅』に云う、「また使むなり。馬を養うなり。」また、『方言』に云う、「広きなり。」

和訳

「扈」の反切は胡と古である。「扈」とは広々として大きいことを意味する。また、『爾雅』には「人に仕えさせる、あるいは馬を飼育する意味もある」

と記されている。さらに、『方言』には「広い」という意味もあると記されている。

校異

- 1 「又『爾雅』云」……磧砂藏あり、高麗藏に存しない。
- 2 「又『方言』、廣也」……磧砂藏あり、高麗藏に存しない。

注釈

1 扈從……歴代の文献で様々な意味を持つ言葉である。一般的には「付き従う」「同行する」といった意味が強調されるが、特に皇帝や高位の人物が行動する際に、その周囲に従う護衛や随行者を指すことが多い。具体的には以下のような使われ方がある…

- (1) 皇帝の巡行時に、護衛や従者として同行する人々。
- (2) 一般的な随行者を指す場合。
- (3) 皇帝に付き従い、巡行に同行すること。
- (4) 一般的に、何かに付き従う行為そのものを指す。

2 『爾雅』……古代中国の辞書として、語義や言葉の解釈を提供する書物である。「亦使也。養馬也」という説明は、「扈」の一つの意味が、物や人を使役したり、馬を養うことに関連することを示している。つまり、「扈」は単に「広大」だけでなく、特定の機能や役割を果たす意味も持つことを示している。

3 『方言』……古代の方言や言語の解説を収めた書で、地域ごとの異なる言語や語彙について記述している。

第5項目【鎮頭】

吾感反。『廣雅』、搖頭也。『説文』、低頭也。經文作鵠、非也。

經典本文該当箇所

菩薩亦如是、震怖長嘯息。繫心於老苦、鎮頭而瞪矚。念此衰老苦、世人何愛樂。(T0192_04.0006a14~T0192_04.0006a16)

訓読

(鎮の音は) 吾と感の反。『廣雅』に曰く、「頭を揺かすなり。」「説文」に曰く、「頭を低るるなり。」經文に「鵠」と作すは、非なり。

和訳

鎮の反切は吾と感である。『廣雅』には「頭を動かすこと」とあり、『説文』には「頭を下げること」とある。經文で「鵠」と表記されているのは誤りである。

校異

- 1 『廣雅』、搖頭也」……磧砂藏あり、高麗藏には存在しない。
- 2 高麗藏…鵠。磧砂藏…鎮。

注釈

1 『廣雅』……古代中国の辞書で、語彙や言葉の意味を解説する書物である。

2 『説文』……『説文解字』、漢字の成り立ちや意味、用法を解説した古代の辞典である。『説文解字』では、「鎮」は「低頭也(頭を低くする)」こと、すなわち頭を下げる動作を指す。これは「鎮」の使い方が、時には謙虚さや礼儀を示す行動と結びついていることを意味する。

3 「經文作鵠、非也」……「鵠」は鳥の名前であり、「鎮」とは異なる意義である。この誤写は、正しい意味の理解を妨げるため、訂正が必要である。

第6項目【腳聯】

今作連、同。力然反。相聯續也。『聲類』、聯綿不絶也。

經典本文該当箇所

天復化病人、守命在路傍。身瘦而腹大、呼吸長喘息。手脚攣枯燥、悲泣而呻吟。(T0192_04.0006a27~T0192_04.0006a29)

訓読

今、「連」と作り、同じ。(聯の音は) 力と然の反。相聯續するなり。『聲類』(に曰く)、聯綿して絶えずなり。

和 訳

今、連という形は同じ意味で使用されている。聯の反切は力と然である。それはお互いに連続して繋がっていることを意味する。『聲類』では、繋がりが途切れることなく続いていると記されている。

注 釈

1 攣……大正蔵用字。現在、「手や腕が病気などのために自由に動かせないこと」を指すことが多い。しかし、『説文解字』では「係也（係る）」とあり、声符として「从手𢇛聲。呂員切」と記されている。これは、聯と同じ意味として解釈される。

2 『聲類』……中国の古典的な音韻学書で、音の変化や対応関係を記録した辞典である。この部分で「聯綿不絶也」とあるのは、物事が途切れることなく続いている様子を示しており、言葉や事象が終わることなく続く状態を表す。

第7項目【𢇛直】

他頂反。𢇛直、『説文』、長兒也。𢇛𢇛、正直也。

經典本文該当箇所

諸根壞命斷、心散意識離。神逝形乾燥、𢇛直如枯木。親戚諸朋友、恩愛素纏綿。(T0192_04.0006c04~T0192_04.0006c06)

訓 読

(𢇛の音は) 他と頂の反。𢇛にして直し、『説文』(に曰く、) 長き貌なり。𢇛𢇛として、正直なり。

和 訳

𢇛の反切は他と頂である。𢇛はまっすぐで、『説文』には「長い姿」と記されている。また、「𢇛𢇛」とは、まっすぐで正直なさまを指す。

注 釈

1 𢇛……大正蔵用字。『説文解字』では「拔也。从手廷聲。徒鼎切」と記されており、𢇛と同じ意味で使われている。

2 『説文』、長兒也……この文では「𢇛」の意味が「長い姿」であることを記す。すなわち、「𢇛」という字は、背が高くてもまっすぐな姿を象徴するものとして解釈される。

3 「𢇛𢇛、正直也」……「𢇛𢇛」とは、まっすぐで正直な様子を表す。

この表現は、「𢇛」がただの姿勢や体型だけでなく、人格的な側面、つまり正直であることを意味することを示す。

第8項目【車軾】

書翼反。軾高三尺三寸。『説文』、軾、車前也。『儀禮』、君軾之。鄭玄曰、古者亦乘軾、謂小俛以禮主人也。

經典本文該當箇所

太子心驚怛、身垂車軾前。息殆絶而嘆、世人一何誤。(T0192_04.0006c12
~T0192_04.0006c13)

訓読

(軾の音は)書と翼の反。軾は高さ三尺三寸なり。『説文』(に曰く)「軾は車の前に置く。『儀礼』(に曰く)「君に軾する」。鄭玄曰く、「古はまた軾に乗る。小しく俛して主人を礼するを謂うなり」。

和訳

軾の反切は書と翼である。軾は高さ三尺三寸である。『説文』には「軾とは車の前に置かれるもの」と記されている。『儀礼』には「君主が軾を使う」と記されている。鄭玄は「古代には、人々が軾に乗り、少し身をかがめて主人に礼を尽くしていたことを意味する」と述べている。

注釈

1 『儀禮』……儒教の学者である周公旦の時代(紀元前一一世紀)を背景に、主に儀式や礼法の規定を記した書物で、礼儀や儀式の実施方法、具体的な動作や言葉、祭りや儀式の手順などに焦点を当てている。

2 軾……軾は車の前部に取り付けられる部品で、車両の構造の一部として重要な役割を果たす。その高さはおよそ三尺三寸(約一〇〇cm)である。

3 鄭玄の解説……軾に乗る行為は、謙遜と敬意を示すための儀式的な行動であったことがわかる。

第9項目【形褻】

思列反。鄙陋也、褻黷也。

經典本文該當箇所

妖搖而徐歩、詐親漸習近。情欲實其心、兼奉大王旨。慢形嫫隱陋、忘其慚愧情。(T0192_04.0007b02~T0192_04.0007b04)

*嫫Ⅱ褻(宋)

訓読

(褻の音は)思と列の反。鄙陋なり、褻黷なり。

和訳

褻の反切は思と列である。粗野で品位がなく、汚れた、または品性に欠けたさまである。

注釈

1 形褻……外見や態度が粗野で、品位に欠けた状態を指す。「褻」は、物が汚れている、または不潔であるという意味であり、人の振る舞いや心がそのような状態であることを表現する。

- 2 經典の「慢形嫫隱陋」……これが「慢」な態度で品位に欠けた姿勢を示し、「忘其慚愧情」と続き、愚かな振る舞いや品位の無さを強調する。
- 3 「褻」と「嫫」……段玉裁『説文解字注』「今人从褻衣字為之。褻行而嫫廢矣。」

第10項目【勸勵】

虛玉反。勗謂勉勵也。『方言』、齊魯謂勉爲勗滋。勸、相勸勵也。

經典本文該当箇所

不知少壯色、俄頃老死壤。哀哉此大惑、愚癡覆其心。當思老病死、晝夜勤勗勵。鋒刃臨其頸、如何猶嬉笑。(T0192_04.0007b20～T0192_04.0007b23)

訓読

(勗の音は) 虚と玉の反。勗は勉勵を謂うなり。『方言』(に曰く) 齊魯は勉をして勗滋を為すと謂う。勸は相勸勵するなり。

和訳

勸の反切は虚と玉である。勗は、努力を促すことを意味する。『方言』には「齊や魯の地方では、勉めることを『勗滋』と言う」と記されている。また、勸はお互いに励まし合うことを指す。

校異

- 1 「『方言』、齊魯謂勉爲勗滋。勸」……磧砂藏あり、高麗藏には存しない。

注釈

1 「齊魯謂勉爲勗滋」……「勗滋」は「勉めること」の意味で、特に中国の齊・魯地方で使われていた表現であることがわかる。地域ごとの言語の変異が反映されている。

2 勸勵……「勸」は、努力や奮闘を促す意味で使われ、日常的に勉勵を指す。「勸勵」の組み合わせは、他者に対して励ます、または自分を奮い立たせる行動を意味する。

3 經典の「晝夜勤勗勵」……經典の文中で「勗勵」とは、老病死を思い、晝夜を問わず自分を励まし、懸命に修行する姿を表現する。

第二卷

第11項目【睽睞】

式冉反、下式亦反。睽睞、暫窺疾視不定也。經文作郝、非也。

經典本文該当箇所

持鹿戒梵志、隨鹿遊山林。麁性鹿睽睞、見太子端視。隨鹿諸梵志、端視亦復然。(T0192_04.0012c09～T0192_04.0012c11)

訓 読

（睽の音は）式と冉の反。（睽の音は）式と亦の反。睽睽、暫し窺い疾視して不定なり。経文に郝と作すは、非なり。

和 訳

睽の反切は式と冉であり、睽の反切は式と亦である。睽睽とは、一時的に見つめたり、目を速く動かして視線が定まらない様子を指す。経文で「郝」と記されているのは誤りである。

注 釈

1 睽睽……視線が定まらない状態を指す。視覚的に不確定または焦点を合わせることなく物を見ている状態を表現する。

第12項目【檻樓】

古文檻、又作檻、同。力甘反。謂衣敗也。凡人衣破醜弊皆謂之檻樓。

經典本文該当箇所

悉捨莊嚴具、毀悴不鮮明。舉體無光耀、猶如細小星。衣裳壞縊縷、状如被賊形。(T0192_04.0014c17~T0192_04.0014c19)

訓 読

古文檻、また檻と作り、同じ。（檻の音は）力と甘の反。衣が敗れることを謂う。凡そ人の衣の破醜弊は、皆これを檻樓と謂う。

和 訳

古い文字では「檻」と書かれ、また「檻」とも書かれ、いずれも同じ意味である。檻の反切は力と甘であり、衣服が破れていることを示す。人々は、衣服が破れてみすばらしくなった状態をすべて「檻樓」と呼ぶ。

注 釈

1 檻樓……大正蔵…「縊縷」、異体字である。

2 「檻」と「縊」……「縊縷」の古文字には「檻」が使われることがあり、この文字も「縊」と同義である。「縊」という字自体は、衣服が破れた様子や、状態が悪くなった物に使われることがある。

3 經典の「衣裳壞縊縷」……經典では、衣服の状態がひどく破れたり、ほつれたりして、光沢や美しさが失われ、むしろ貧弱な印象を与えることを表現している。

第13項目【不躅】

又作躅、同。馳録反。『漢書音義』曰、軌、躅跡也。三輔謂牛蹄處爲躅。

經典本文該当箇所

我極畏王法、天神所驅逼。速牽馬與之、俱去疾如飛。厭氣令無聲、足亦不

觸地。城門自然開、虚空自然明。(T0192_04.0015b23~T0192_04.0015b26)

訓 読

また「躡」と作り、同じ。(躡の音は)馳と録の反。『漢書音義』に曰く、「軌は躡跡なり」。三輔は牛の蹄の処を躡と謂う。

和 訳

また「躡」とも書き、同じ意味である。躡の反切は馳と録である。『漢書音義』には「軌とは、足跡のこと」とあり、三輔の地方では、牛の蹄が踏んだ場所を「躡」と呼ぶ。

注 釈

1 不躡……大正蔵…「不觸」

『説文解字』は、「躡躡也」(足音や足跡)を意味し、足を踏みつける動きに関係する字である。

「觸」は物に対して角が触れる意味。

また「躡」とも書かれることがあり、両者は同義であり、どちらも「躡」と関連している。足跡が残らない、または目に見える跡がないことを示唆する表現である。

2 三輔……西漢時代の地名で、特に長安周辺の地域を指す。

3 經典の「足亦不觸地」……經典の本文では、速く飛ぶように進む際に「足も地面に触れず、跡も残さない」様子を表現している。

第14項目【綢繆】

直流反。『詩』云、綢繆束薪。『傳』曰、綢繆猶纏綿也。『廣雅』、綢、韜也、纏也。韜音土勞反。

經典本文該当箇所

壯年心輕躁、馳騁五欲境。疇侶契纏綿、情交相感深。年宿寡綢繆、順法者所宗。五欲悉休廢、增長樂法心。(T0192_04.0020a21~T0192_04.0020a24)
*音義の第二巻に見られ、經典の第三巻に見られる。

訓 読

(綢の音は)直と流の反。『詩』に云う、「綢繆して薪を束ねる」。『傳』に曰く、「綢繆は猶、綿を纏うことなり」。『廣雅』(に曰く)「綢は韜なり、纏なり」。韜の音は、土と勞の反。

和 訳

綢の反切は直と流である。『詩経』には「綢繆として薪を束ねよ」とある。『傳』では「綢繆とは、まるで纏綿(絡み合うようなさま)を指す」と解説されている。また『廣雅』には、「綢とは包み込むこと、巻きつけること」とある。韜の反切は力と甘である。

校 異

1 『廣雅』、綢、韜也、纏也。韜音土勞反。……磧砂藏あり、高麗藏存しない。

注 釈

1 『詩』……『詩經』ともいう。中国最古の詩集で、儒教の五經の一つに数えられる古典であり、周王朝から春秋時代にかけて詠まれた詩を収録している。

2 綢繆……物を縛る、包む、または織り上げることを意味する。具体的には、「綢」は絹や麻などの織物を指し、織り合わせたり、編んだりする行為を示す。「繆」は結びつけること、または絡み合わせることを意味している。経典での「綢繆」も、物事がしつかりと絡み合い、結びついていく状態を表す。

3 韜……「包む」、「隠す」という意味があり、物を外部から守る役割を持つ。

第三卷

第15項目【樊籠】

扶袁反。案樊即籠也。『莊子』「擇雉不祈畜於樊中」是也。樊、藩也。

經典本文該当箇所

觀察無所有、是無所有處。文閭皮骨離、野鳥離樊籠。遠離於境界、解脱亦

復。(T0192_04.0023c11~T0192_04.0023c13)

訓 読

(樊の音は)扶と袁の反。案ずるに樊、即ち籠なり。『莊子』(に曰く)、「澤雉は樊中に畜わるるを祈めず」と是なり。樊は藩なり。

和 訳

樊の反切は扶と袁である。「樊」とは、まさに「籠」のことである。『莊子』には「自然の沢にいる雉は鳥籠の中に飼われることを願ひ求めない。」と述べられている。「樊」は、藩(囲い)の意味である。

注 釈

1 擇雉不祈畜於樊中……『莊子・内篇・養生主』より、「澤雉十步一啄、百步一飲、不祈畜乎樊中」。ここで「樊」は、鳥を飼うための囲い、つまり「樊籠」を指し、自由を尊重し、囲いに入れることを避けるという考え方が示されている。

2 樊籠……囲いまたは檻を意味する。ここでの「樊」は、動物や鳥を囲うための柵や檻を指し、「籠」とはほぼ同義である。

3 經典の「野鳥離樊籠」……束縛からの解放を意味する。樊籠から解き放たれた鳥が自由に飛び立つ様子を描いている。

第16項目【轟轟】

呼萌反。『説文』、羣車聲也。

經典本文該当箇所

言曾見先佛、地動相如今。牟尼德尊長、大地所不勝。步步足履地、轟轟震動聲。妙光照天下、猶若朝日明。(T0192_04.0024c28～T0192_04.0025a02)

訓読

(轟の音は) 呼と萌の反。『説文』(に曰く)「群車の声なり」。

和訳

轟の反切は呼と萌である。『説文解字』には、「群車とは車の音である」と記されている。

注釈

1 轟轟……強い音や激しい音を表す擬音語で、しばしば大きな動作や力強い響きを伴う状況を描写する。『説文解字』によると、この言葉は「群車の声」に由来し、複数の車が進む音を指している。

2 經典の「轟轟震動聲」……仏陀の足音が大地を震わせる力強い響きとして表現されている。

第17項目【呼呬】

呼甲反。『説文』、呬、吸。『子虚賦』云、呬吸翠粲。『音義』曰、衣起張也。經文或作唬呬。唬音呼交反。

經典本文該当箇所

或空中旋轉、或飛騰樹間。或呼呬吼喚、惡聲震天地。如是諸惡類、圍遶菩提樹。(T0192_04.0025c28～T0192_04.0026a01)

*呼呬＝唬呀(三)

訓読

(呬の音は) 呼と甲の反。『説文』(に曰く)「呬は吸するなり」。『子虚賦』に云う、「呬吸して翠粲たることを」。『音義』に曰く、「衣起り張るなり」。經文に、また唬呬と作すことあり。唬の音は、呼と交の反。

和訳

呬の反切は呼と甲である。『説文解字』には「呬とは吸うことだ」と記されている。『子虚賦』では「呬吸して翠粲のような美しさを得る」と言っている。『音義』では、「衣が起きて張るさま」を指すと説明されている。經文には、また「唬呬」と記されていることもある。唬の反切は呼と交である。

注 釈

- 1 呻……「吸うこと」を意味する字で、主に呼吸や吸い込む行為を示す。『説文解字』には「吸呻也」、この字が使われる文脈では、何かを吸い込む、あるいは息を吸う動作を指す。
- 2 『子虚賦』の「呻吸翠粲」……『子虚賦』は司馬相如によって書かれた中国前漢時代の辞賦で、虚構の世界を描写し、自然の美や宮廷の壮麗さを誇張している。『子虚賦』曰…翕呻翠粲。張揖曰…翠粲、衣声也。
- 3 『音義』曰、衣起張也……この場合、衣服がふくらむ様子や膨らみを作る動作を表す。
- 4 經典の「呼叫吼喚」……激しい音や叫びが天を震わせる描写があり、これに関連して「呻」や「唬呻」といった表現が用いられている。

第18項目【裂眚】

在計反。『説文』、目崖也。『史記』作睚眚。五賣反、財賣反。瞋目兒也。『漢書』作厖眚、並此義也。『淮南子』云「瞋目裂眚」是也。

經典本文該当箇所

魔衆相驅策、各進其威力。迭共相催切、須臾令摧滅。裂目而切齒、亂飛而超摧。菩薩默然觀、如看童兒戲。(T0192_04.0026a15~T0192_04.0026a18)

* 目而〓眚加〈三〉

訓 読

(眚の音は) 在と計の反。『説文』(に曰く) 目の崖。『史記』に「睚眚」と作す。(眚の音は) 五と賣の反。(また) 財と賣の反。目を瞋らせる貌なり。『漢書』に「厖眚」と作く、同じ。『淮南子』に云う、「瞋目して眚を裂く」、これなり。

和 訳

眚の反切は在と計である。『説文解字』には「目の崖」とあり、また『史記』には「睚眚」と記されている。眚の反切は五と賣、また財と賣であり、いずれも瞋目、すなわち怒って目を睨む様子を指す。『漢書』にも「厖眚」と記され、これも同義である。さらに、『淮南子』には「瞋目して眚を裂く」という表現が見受けられる。

注 釈

- 1 裂眚……怒りや激しい感情を表現するための言葉で、目を見開き、怒って睨みつける様子を指す。ここで「裂」は、目を大きく見開くことを意味し、「眚」は目の端、目尻部分を指す。
- 2 睚眚……『史記』に登場する「睚眚」は、怒った表情、すなわち目を見開いて睨むことを意味する。『説文解字』では「目の崖」という説明がされており、目尻部分の険しい形状を指していると解釈される。
- 3 經典の「裂目而切齒」……強い怒りの感情を強調するために使われている。

第19項目【**澀毒**】

蘇悶反。『通俗文』、水溢曰澀。『埤蒼』、澀、歎也。經文作𦵏、非也。歎音普悶反。

經典本文該当箇所

雷震雨大雹、化成五色花。惡龍蛇𦵏毒、化成香風氣。諸種種形類、欲害菩薩者。(T0192_04.0026a22~T0192_04.0026a24)

* 𦵏＝噴〈元〉〈明〉

訓 読

(澀の音は) 蘇と悶の反。『通俗文』(に曰く)「水溢は澀と言う」。『埤蒼』(に曰く)「澀は歎なり」。經文には「𦵏」と作す、非なり。歎の音は普と悶の反。

和 訳

澀の反切は蘇と悶である。『通俗文』には「水溢は、澀とも呼ばれる」と記されている。『埤蒼』では「澀は歎である」と記されている。經文には「𦵏」と書かれているが、これは誤用である。歎の反切は普と悶である。

校 異

1 見出し語と語釈……磧砂藏あり、高麗藏には見当たらない。

注 釈

- 1 『通俗文』……中国の後漢時代に編纂された文献で、日常生活の用語や儀礼を通俗的に説明することを目的とした。
- 2 『埤蒼』……中国後漢時代の学者・服虔によって編纂された辞書。
- 3 水溢……『通俗文』に登場する「水溢」は、流れの速い水や急流を指し、その状態を表現するために「澀」という語が使われている。
- 4 歎……『埤蒼』によると、「澀」は「歎」とも呼ばれる。歎という字は、特に古代の辞書での定義や解釈に基づいており、水や流れ、もしくは液体が激しく湧き出るような状態を示す言葉として使用される。
- 5 經典の「惡龍蛇𦵏毒」……經典の文脈において、「𦵏毒」という表現は、悪しきものや害を及ぼすものを示している。

第20項目【**爲軻**】

又作初、同。如振反。『説文』、礙車也。『楚辭』、朝發軻。王逸曰、軻、支輪木也。

經典本文該当箇所

淨戒爲衆輻、調伏寂定齊。堅固智爲輞、慚愧楔其間。正念以爲轂、成眞實法輪。正眞出三界、不退從邪師。(T0192_04.0030b24~T0192_04.0030b27)

訓 読

また「𨋖」と作り、同じ。(𨋖の音は) 如と振の反。『説文』(に曰く)「車を礙げるなり」。『楚辭』(に曰く)「朝に発てて𨋖す」。王逸曰く、「𨋖は支輪木なり」。

和 訳

また「𨋖」とも書き、同じ意味である。𨋖の反切は如と振である。『説文解字』には「𨋖とは車を妨げるものである」と記されている。『楚辭』には「朝に出発し、𨋖をかける」という表現がある。王逸は「𨋖とは車輪を支える木の部材である」と説明している。

校 異

1 『楚辭』、朝発𨋖。王逸曰、𨋖……磧砂蔵あり、高麗蔵には見当たらない。

注 釈

1 『楚辭』、朝発𨋖……朝に出発して車輪の動きを調整することを意味しており、ここでは旅行や遠征の準備として車止めを外す動作が述べられている。𨋖は車輪を支える重要な部品であり、出発前にそれを整えることが示唆されている。

2 「爲𨋖」……経典には「爲𨋖」という語が直接的には登場しませんが、類似の表現として「爲𨋖」や「爲𨋖」が見受けられる。これらの語は車輪の各部位を指し、特に「爲𨋖」や「爲𨋖」は車輪の構造や機能に関連する部分を説明しており、「爲𨋖」もその一部として、車輪の回転や安定を支

える重要な部材として理解されるべきである。

3 「爲𨋖」……『玉篇』によると、「𨋖」は車輪の外枠部分を指し、特にその形状が網のように車輪を囲むことから、車輪の保護や回転における安定性を提供する。『後漢輿服志』では、天子の狩り用の車に使用される𨋖が、装飾として龍が周囲を取り巻くことが記されている。これにより、車輪が王権や威厳を象徴する重要な部位であることが強調されている。

4 「爲𨋖」……「爲𨋖」は車輪の中心部、車軸を通す部分を意味する。この部分は車輪の回転を支えるため、非常に重要な役割を果たす。『玉篇』によると、𨋖は車輪の中心にあたる円形の木材で、車輪の回転をスムーズにし、車軸との連動を保つために不可欠な部品である。車輪の中心部を安定させることは、全体の動きを円滑にするために重要な役割を果たしている。

第21項目【風霽】

子詣反。『説文』、雨止也。『爾雅』注云、南陽人呼雨止爲霽也。

経典本文該当箇所

廣爲群生類、轉寂靜法輪。風霽雲霧除、空中雨天華。諸天奏天樂、嘉歎未曾有。(T0192_04.0030c03~T0192_04.0030c05)

訓 読

(霽の音は) 子と詣の反。『説文』(に曰く)「雨止なり」。『爾雅』の注に

云う、「南陽の人々は、雨止を霽と呼ぶなり」。

和 訳

霽の反切は子と詣である。『説文解字』には「雨が止むことだ」と記されている。『爾雅』の注釈には、「南陽の人々は、雨が止んだことを霽と呼ぶ」とある。

校 異

1 『爾雅』注云……磧砂藏に記録があり、高麗藏には存在しない。

注 釈

1 『爾雅』注云、南陽人呼雨止爲霽也」……『爾雅』の注には、特定の地域や風習に関する情報がしばしば含まれており、この場合、南陽地方の人々が「雨が止むこと」を「霽」と呼ぶという風習が記されている。この注釈は、地域ごとの言葉の使い方に差異があったことを示しており、同じ現象でも地方によって異なる呼び方があることを反映している。

2 經典の「風霽雲霧除」……經典の「風霽」という表現は、風と霽が組み合わさった形で、風によって雨が止んだ後の晴れ間を示唆している。

第四卷

第22項目【羽葆】

或作翬、同。補道反。謂合聚五色羽爲葆。『漢書』「羽葆」是也。

經典本文該当箇所

堂堂儀雅容、束身視地行。應戴羽寶蓋、手攬飛龍轡。如何冒游塵、執鉢而行乞。(T0192_04.0038a20~T0192_04.0038a22)

*寶Ⅱ葆〈三〉

訓 読

或は翬と作り、同じ。(葆の音は)補と道の反。合めて五色の羽を聚めて葆を為すことを謂う。『漢書』に「羽葆」とあるのは是れなり。

和 訳

あるいは「翬」とも書かれ、同じ意味である。葆の反切は補と道であり、五色の羽を集めて葆を作ることを指す。『漢書』に「羽葆」と記されているのは、このことを意味している。

校 異

1 『漢書』「羽葆」是也。」……磧砂藏に記録があり、高麗藏には存在し

ない。

第23項目【火鎔】

榆鍾反。『説文』、治器法也。『漢書』、猶金在鎔。應劭曰、鐵形也。

經典本文該当箇所

古昔諸勝王、猶若自在天。勇健志騰虛、暫顯已磨滅。劫火鎔須彌、海水悉枯竭。(T0192_04.0039b01～T0192_04.0039b03)

訓読

(鎔の音は) 榆と鍾の反。『説文』(に曰く)「治器の法なり」。『漢書』(に曰く)「猶金を鎔するに在り」。應劭曰く、「鉄の形なり」。

和訳

鎔の反切は榆と鍾である。『説文解字』には「治器とは、器物を作る方法のことだ」と記されている。『漢書』には「金が溶けて形を作るようなものだ」と記されており、應劭はこれを「鉄の形だ」と解説している。

校異

1 『漢書』、猶金在鎔。應劭曰「……磧砂藏あり、高麗藏には存在しない。

注釈

1 『漢書』……中国の歴史書の一つで、前漢の歴史を記録したもので、司馬遷の『史記』を引き継ぐ形で編纂されている。この中で「猶金在鎔」というのは、金属を溶かして形を作る技術や過程を表すものであり、変化や変容を象徴するものとして使われている。

2 應劭の解釈……應劭は、後漢の時代に活躍した学者で、古代の文字や字義の研究を行なった。「鉄の形なり」というのは、火鎔という言葉が示す金属の溶解と固化の過程において、鉄のように形が変わりながらも強固で安定したものを形成することに着目したものである。

3 經典の「劫火鎔須彌」……劫火が須彌山を溶かし、すべてを焼き尽くすという象徴的な言い回しである。ここで「火鎔」は物理的な溶解を意味するだけでなく、時間の経過とともにすべてを浄化・消滅させる力を象徴している。

第五卷

第24項目【冠袞】

姑本反。『爾雅』、袞、敝也。郭璞曰、袞衣有黻文也。玄衣而畫以龍者也。經文作袞、非也。黻音甫勿反。

經典本文該當箇所

青赤黄綠色、其衆各異儀。導從翼前後、爭塗競路前。天冠袞花服、寶飾以莊嚴。威容盛明曜、增暉彼園林。(T0192_04.0042b25~T0192_04.0042b28)

訓読

(袞の音は) 姑と本の反。『爾雅』(に曰く)「袞は散なり」。郭璞曰く、「袞衣は黻文を有つなり。玄衣にして龍を画く者なり」。經文に袞と作る、非なり。黻の音、甫と勿の反。

和訳

袞の反切は姑と本である。『爾雅』には「袞は散である」と記されており、郭璞は「袞の衣は黻模様を持ち、黒い衣に龍を描いたものである」と述べている。經文では「袞」と記されているが、これは誤用である。黻の反切は甫と勿である。

注釈

- 1 袞……古代中国の高位の人物が着る衣服を指す言葉であり、特に皇帝や貴族が着る竜の縫取り模様のある礼服を指す。
- 2 黻……古代の礼服や装飾に用いられる模様で、『説文解字』では「黒与青相次文」と説明されており、青と黒が交互に並んだ模様が特徴的である。黻の模様は、威嚴や尊嚴を象徴し、主に高位の人物が着る衣服に刺繡された。

第25項目【崦嵫】

又作嶠、同。猗廉反、下子辭反。『山海經』云、鳥鼠同穴。山西南三百六十里有山名崦嵫、日所入也。『楚辭』、望崦嵫而勿迫。王逸曰、山名。下有豪水、水中虞淵日所入也。

經典本文該當箇所

善御七駿馬、軍衆羽從遊。光光日天子、猶入於崦嵫。日月五障翳、衆生失光明。(T0192_04.0050c04~T0192_04.0050c06)

訓読

また嶠と作り、同じ。(崦の音は) 猗と廉の反。(嵫の音は) 子と辭の反。『山海經』に云う、「鳥鼠同穴す」。山西南三百六十里に山あり、名づけて崦嵫という。日所入るなり。『楚辭』(に曰く)「崦嵫を望みて迫ることなかれ」。王逸曰く、「山名なり。下に豪水あり、水中に虞淵あり、日所入るなり」。

和訳

また「嶠」とも書かれ、同じ意味である。崦の反切は猗と廉であり、嵫の反切は子と辭である。『山海經』には「鳥と鼠が同じ穴に住む」とあり、山西南三百六十里に「崦嵫」と名付けられた山があり、そこが太陽の沈む場所である。『楚辭』には「崦嵫を見て、近づかないようにせよ」と記載

されている。王逸は「崦嵫は山の名前であり、山の下には豪水があり、その水中に虞淵がある場所で、太陽が沈む場所である」と述べている。

注 釈

1 『山海経』……中国の古代文献で、山や川、土地、動植物に関する記録が記載されており、神話や伝説も含まれている。

2 『楚辞』……戦国時代の詩人屈原を代表とする楚の詩歌の集成である。「崦嵫を望みて迫ることなかれ」という言葉は、崦嵫という場所が何らかの神聖または禁忌の意味を持つことを示唆している。

3 王逸……王逸は、古代中国の注釈家であり、特に『楚辞』に関する注釈を多く残している。彼の解釈によれば、崦嵫は単なる山の名前ではなく、その下には「豪水」が存在し、水中に「虞淵」がある場所で、太陽が沈む場所としての神聖さを持つとされている。

第26項目【迄于】

虚乞反。『爾雅』、迄、至也。

經典本文該当箇所

令一切樂法、以慧充一切。悉安慰一切、一切德普流。名聞遍一切、重照迄於今。諸有競德者、於彼哀愍心。(T0192_04.0050c18~T0192_04.0050c21)

* 於||于<三>

訓 読

(迄の音は) 虚と乞の反。『爾雅』(に曰く)「迄は至るなり」。

和 訳

迄の反切は虚と乞であり、『爾雅』には「迄とは、至ることだ」と記載されている。

注 釈

1 經典の「重照迄於今」……經典における「迄於今」は、「至今」という意味で用いられ、徳や功績が今に至るまで広く影響を与えている様子を表す。